はじめに

本書は、女房ことばと、女中ことばを武家礼法として制度化された女性語と捉え、このことを基軸にして中世後期以後の女性語集の諸事象を考察したものである。そのため、従来のいわゆる「女房詞」の論と、種々の点で、さまざまな形で異なっている。

多くの時間が過ぎた。最初に書いた「女中ことば集とその所収語の性格」（『国語国文 三五巻六号』）は昭和四一年の発表である。今から四八年も前である。構想・資料集め・執筆の頃から数えると、五〇年も前の産物ということになる。ここでは、元禄五年の奥書をもつ伝書系の『女中詞』と、ほぼ同時期に刊行された『婦人養草』と『女重宝記』に収載された、女性書系の女中ことば集の成立、および、それらの関係を考察し、女中ことば集についての基本的な問題を提起した。

この続編、あるいは基礎編ともいうべき「元禄五年本『女中詞』」（『近代語研究 第三集』）が出たのは昭和四七年である。四〇年ほど前のことである。副題は「原著者および転写者について」である。まだ学界に全貌が知られていなかった最古の伝書系女中ことば集である元禄五年本『女中詞』を影印で紹介し、奥書に記されている伊藤甚右衛門や、同類の写本の奥書に見える人たちの素性を明らかにして、小笠原流水島派の武家礼法家のなかに位置づけた。この二つの論文の間に、公家社会の女性語に関する「女房ことばの変遷―『する〈〉』の場合―」（『国語国文 三六巻四号』

昭和四二年四月）と、「室町時代／における堂上の女性の表現」（『国語国文 三七巻四号』昭和四三年四月）を発表した。これら四点と、その後の論考を中心に、不足の部分を書き足して、本書を四部の構成にした。さらに、新出の女中ことば集を附録に付けた。旧稿を大幅に書き改め、あるいは補注を付けて、その後の手当をするとともに、各部・各章がテーマの「女中ことば集の研究―女性語の制度化と展開―」に統合するよう工夫した。大幅な削除も行った。用語も可能な限り統一した。

書き始めから今日までの間に、この種の女性語に対する筆者の考えは変わった。考察の手法も変化した。中世後期から近代までの、この種の女性語の実態・変化・価値を説明するのに、どのような時代区分をし、この種の女性語にいかなる名称を与えるのが適切か、迷った。その結果、時代は中世後期・近世・近代に分け、結果的に、近代を重視した。また、女性語、および、女性語集の名称は、古い文献に記されたもの、この種の女性語の研究に従来、使用されてきたものなどを勘案して、「女房ことば」の他に、「女中ことば」や、「御所ことば」「公家社会の女性語」「公家ことば」などの名称を用いることにした。従来、さまざまな意味で使われて来た「女房ことば」（「女房詞」と書かれることが多い）という術語のみでは、この種の女性語は説ききれないし、誤解が生じると考えたからである。階層については「公家社会」に対して「武家社会」を用い、町人層を含めて「武士社会等」を使った。

「御所ことば」は、『海人藻芥』で紹介された「内裏・仙洞」の異名の外、公家社会の女性が用いたこの種の異名や、特有の形状語、特有の表現を指す用語として使った。「公家の女性語」「公家社会の女性の表現」と言うのと同じである。公家社会では男性も、女性と同じ特有の異名・形容語を使うことがあるので、男性のこれらを併せて、本書では「公家ことば」と言うことがある。言語面では、「公家ことば」は「御所ことば」「公家の女性語」「公家社会の女性の表現」と同じである。

「女房ことば」は武家の故実書である『大上臈御名之事』に記された名称で、公家の女性語を武家の女性用として取り入れたものである。武家の故実家が公家社会の女性語を武家社会に移入し、武家の女性語として制度化したのが「女房ことば」である。したがって、「女房ことば」は武家社会における礼法語であり、規範語である。また、考証の対象となる女性語である。ゆえに、収集された女性語でもある。一項目（通常語）に対して複数の異名が記されるのは、位相別・用途別の異名である場合もあろうが、寄せ集めの結果である可能性もある。異名のほかに、公家の女性が使用する特有の形状語や表現も武家社会に移入されたに違いない。しかし、『大上臈御名之事』の「女房ことば」では食物を中心として、道具類を若干、加えた異名が九九パーセントを占める。ゆえに、「女房ことば」は異名、ないしは異名集の意味に使われることが多い。本書でも通常はそのように使用する。残りの一パーセントが重要であることは別に説く。さらに、重要なのは、従来、「女房ことば」の名称は公家社会の女性語であることに重点を置いて使われ、「御所ことば」と同義語として使用されることがある、ということである〔筆者も、そのように使ったことがある〕。「女房ことば」は、「御所ことば」や「公家の女性語」と同義語ではない。これらが同一に扱われ、武家社会の故実の世界に取り入れられた側面が従来の女性語研究では軽視されて来た。繰り返すが、本書では、「女房ことば」とは武家礼法としての女性語であるとする。たしかに、「女房ことば」は、「公家社会の女性が使用する女性語」が「武家社会の女性の故実語として移入された女性語」であるから、二面性をもつ。後者から前者を見通し、見極めることができる。後者からしか前者を窺うことのできないことさえある。しかし、両者は別物である。前者は自然な女性語であり、後者は規範としての、公的で強制力のある女性語である。このように簡単に言い切れないのが実状であるが、あえて言えば、公家社会の女性語には女性語としての礼法的な側面が弱かった。したがって、前者は公家の男性が使うこともある。しかし、後者を武士が使うことは原則として、ない。使用しないのが作法であった。さらに後者は一語以外は物の異名であるが、前者には異名の他に、特異な形容語や表現が多数あり、異名はその一部を占める

に過ぎない。

「女中ことば」は、近世の武家社会において女性の礼法として定められた女性語であり、後に町人層などの女性にも広まる女性語である。『大上臈御名之事』の「女房ことば」に比べると数が多く、種類も増える。これらは小笠原流水島派の伝書系女中ことば集、『女中詞』『女中言葉』『女言葉』に収録されている。この類を承けて女性書系の女中ことば集が編集された。

本書では、女中ことば集の種類（内容）を、女性語群Ⅰ・女性語群Ⅱ・女性語群Ⅲの三類に分ける。女性語群Ⅰが「女房ことば」とほぼ対応する異名集である。近世の女性書に収載された女中ことば集のなかで、近代の女性語に繋がり、さらに発展が予想される点で重要なのは女性語群Ⅱである。『大上臈御名之事』に掲載されている、異名以外の一パーセントに当たる一語がこの種類の語に属する。一言で言えば、社交語である。女性語群Ⅲは古語集である。女性語群Ⅰ・女性語群Ⅱ・女性語群Ⅲは華麗に近世の女性書を彩り、そのことにおいて、女中ことば集の本質を不分明にした。この、見紛う近世女性書系の女中ことば集を分析して女中ことば集や、女中ことばの本来の姿を探り、女中ことばの終焉と、近代以後の女性語への影響を考察したのが第一部と第二部である。

第三部では、女房ことば・女中ことばや、女房ことば集・女中ことば集を故実の世界のなかに位置づけることによって、初めて理解できる女性語の諸事象を中心に述べた。第一章では中世後期の故実の世界に見られる敬語生活と女性語との係わりを取り上げた。第二章では、『日葡辞書』の「女性語」が武家社会で制度化された女性語集を資料にして掲出されたものであると推定し、近世のごく初期に、水島派の女性語集に先立つ先駆的な伝書系女中ことば集の存在することを示唆した。また、この女性語についての情報と、ジョアン・ロドリゲスが『日本大文典』で使用した故実書との関係も示した。第三章では、近世においてなされた、唯一の本格的な女性語論である「くさむすび」が、何故に女性に仮託して書かれなければならなかったかを、女中ことばを武家の故実の世界のなかに置き、著者、田安

宗武の政治的地位と学問的思考との交差のなかで明らかにした。以上の序章から第三部までが女中ことば集に関する、あるいは女中ことばについての考察であり、本書の主体である。

第四部は、公家社会には、武家社会に「女房ことば」として移入された異名のほかに、特に女性に使用された特有の形状語や、表現があり、武家社会に移入された「女房ことば」は、「御所ことば」「公家社会の女性語」の一部に過ぎないことを説いた。「女房ことば」の源流となった公家社会の女性語の特有な言語環境と、言語状態とを明らかにし、『大上臈御名之事』の「女房ことば」に例外的に掲出されている一語の背後にある同類語の広がりを示唆した。さらに、「御所ことば」が公家社会の外に女中ことばとして伝播する経路を考察し、女中ことばの位置を確認した。

附表の「女中ことば集一覧」は、実質的には第二部第一章「女性書の女中ことば集の整理」の一部である。内容の関係から横書きにせざるをえず、縦書きの本文の間に横書きのこの一覧を置くのは不体裁であり、また、見にくくもあり、分量も多いので巻末に別置した。

附録の影印は、伝書系の女中ことば集のうち、もっとも古い年号を奥書に持つ『女中詞』（元禄五年）と、新出の金井寅之助氏旧蔵（現 姫路文学館蔵）の『女言葉』（安永五年奥書）である。元禄五年国会図書館本については第一部第一章で解説した。安永五年金井本は奥書に水島卜也之成と、伊藤卿右衛門幸氏（伊藤甚右衛門の旧名。正しくは郷右衛門）の名を記す唯一の伝書系女中ことば集である。このことは第一部の第一章と第二章の補注で触れた。

本書では、伝書系女中ことば集と、女性書系女中ことば集、これらと係わりのある女性語の事象、および、中世後期の公家の女性語を舞台に上げ、四方から照明を当てて、それらのありのままの姿と、それぞれがもつ互いの関連を浮かび上がらせようと試みた。附表と附録はその装置の一部である。

補注が、本論に比べて膨らみすぎていることがある。その場合、章全体を書き直すことも考えたが、論の流れを乱すことがあるなど、やむをえず補注でまかなわざるをえなかった。しかし、全体を書き直した章もある。本書全体と

しては均衡がとれていない。

本書では引用文が多い。資料性を重視した。それゆえ、できる限り原文の形を残すよう努力したが、句読点を加えたり、傍線を付けたりすることがある。合字は使わない。また、振り仮名を省略することもある。なお、本文の〔　〕のなかは本書をまとめるに当たって、補足や注意事項・関連記事などを示し、本書全体が有機的にまとまるように新たに筆者が付け加えたものである。各章の最後に出した関連文献も本書の編集時に加えたものである。

関連文献

真下　三郎「女房詞」（『国語学辞典』昭和三〇年八月、東京堂刊）。

国田百合子『海人藻芥』（佐藤喜代治編『国語学研究事典』昭和五二年一一月、明治書院刊）。

国田百合子『大上臈御名之事』（『国語学研究事典』）。

松井　利彦「女房ことば・廓ことば」（『国語学研究事典』）。

森野　宗明「女房詞」（『国語学大辞典』昭和五五年九月、東京堂出版刊）。

小林　千草『海人藻芥』（『日本語学研究事典』平成一九年一月、明治書院刊）。

小林　千草『大上臈御名之事』（『日本語学研究事典』）。

佐藤　貴裕「女房ことば」（『日本語学研究事典』）。

目　次

はじめに……i

序章　女中ことば集の成立……1

第一部　伝書系の女中ことば集……39

第一章　伝書系女中ことば集の編者……41

第二章　奥書をもつ女中ことば集……65

第三章　伝書としての女中ことば集……91

第二部　女性書系の女中ことば集……115

第一章　女性書の女中ことば集の整理……117

第二章　女性書の女中ことば集の名称……149

第三章　女性書の女中ことば集の位相……193

第四章　女中ことばの終焉と展開……231

第三部　女中ことば集の背景……271

第一章　中世後期の故実的世界における敬語生活……273
第二章　『日葡辞書』の女性語……295
第三章　武家礼法としての女中ことば――「くさむすび」の成立事情――……335
第四部　公家ことばの諸相……349
第一章　中世後期における公家社会の女性の表現……351
第二章　公家社会の女性語――中世後期の擬態語をめぐって――……383
第三章　公家社会の女性語の伝播――「するすると」の場合――……413
終章……463
おわりに……481
論文発表覚え書き……485
附録　女中ことば集影印……487
元禄五年本『女中詞』（国立国会図書館蔵）……488
安永五年本『女言葉』（姫路文学館蔵）……514
附表　女中ことば集一覧……L25
索引　事項・語句……L1　人名・書名……L14